

指導資料

鹿児島県総合教育センター

教育課程 第12号

- 中学校対象 -

平成13年11月発行

新教育課程への対応

- 教育課程の評価の在り方 -

新しい学習指導要領は、[ゆとり]の中で「特色ある教育」を展開し、生徒に[生きる力]を育成することを基本的なねらいとしている。教育内容の大綱化、「総合的な学習の時間」の創設、1単位時間の弾力化などの改善が行われ、教育課程の編成、実施に関して学校裁量権限の拡大も図られた。

これにより、各学校では、学校や地域の実態を生かし、創意工夫した教育活動を展開し、これまで以上に特色ある学校づくりを進めていくことができるようになった。

本県においても、新世紀カリキュラム審議会答申の中で、これからの鹿児島の学校に望まれる「学校づくりの視点」として、「責任を果たす学校」、「個性の花咲く学校」、「開かれた学校」、「郷土への理解を深め、愛情を培う学校」が示された。各学校では、これらの「学校づくりの視点」を踏まえた上で、鹿児島の教育的風土を生かし、自らの地域や学校の実情に即した主体的な教育実践に取り組み、特色ある学校づくりに努めていかなければならない。

特色ある学校づくりに当たっては、自分の学校や地域にしっかりと根ざした教育課程を編成し、より主体的に教育の実践に取り組ん

でいくことが必要になる。

しかし、それは、同時に各学校で行う教育に関してこれまで以上に責任を求められることにもなる。各学校においては、編成した教育課程が、めざす生徒像の実現に効果的であったかを適切に評価し、工夫改善していくことが必要になる。しかし、これまで行われてきた教育課程の評価の中には、教師による評価のみに終始し、客観性に乏しいという問題点や、評価した結果が改善に十分生かされていないという実態を指摘されるものがある。ここでは、各学校が特色ある学校づくりをめざし、責任ある教育を実施する上での一助となるよう教育課程の評価の在り方について述べる。

1 教育課程の評価に当たって

教育課程の評価は、各学校の教育目標に照らして行うものであり、実施に当たっては、実施の方法等について事前に十分検討する必要がある。

(1) 教育課程の評価の内容

教育課程の評価の内容は、教育課程のすべてにわたるものであり、教育課程の編成から、各教科、道徳、特別活動及び

総合的な学習の時間における指導計画，指導方法などに及ぶ。また，教育課程を編成，実施するために学校の運営上のような創意工夫を加えたかということも評価の対象とすることが大切である。

(2) 教育課程の評価の観点

教育課程の評価は，編成，実施及び成果についての観点をあらかじめ設定して組織的・計画的に行う必要がある。その際，学習指導要領第1章総則に示されている事項のほか，次のような観点が重要である。

- ア 学習指導要領をはじめとする国及び教育委員会の示す指針の趣旨が十分に生かされ，そこに示された基準が満たされているか。
- イ 学校の教育目標が，学校の教育活動全体を通じて十分追求され，成果を上げているか。
- ウ 生徒の実態と適合するよう教育課程が編成実施されているか。
- エ 教職員や施設・設備等の諸条件と適合するよう教育課程が編成，実施されているか。
- オ 保護者や地域社会の期待に応える教育課程となっているか。

(3) 教育課程の評価の方法と留意点

評価の方法としては，職員会議等で協議して評価したり，評価する項目ごとに評価尺度や選択肢を設定し，数量的処理を行ったりする方法などが考えられる。その際，次の点に留意することが大切である。

- ア 全教職員の共通理解を図り，適切な評価の組織の下で協力して組織的に進めること。
- イ 教育課程の評価を年間計画に位置付けるなどして計画的に進めること。
- ウ できるだけ多面的で継続的な評価による客観的な評価となるようにすること。
- エ 生徒の学習への取組の姿や変容の状況，学習の成果など，多様な評価資料を基に教育活動の状況を把握すること。

また，教育課程の評価は，教育活動の区切り当たる学期末や学年末に行われることが多いが，教育課程の評価とその改善は

平素から心掛けて行うことも大切である。例えば，学校行事等，活動単位の大きな教育活動については，活動ごとに評価する必要がある。

2 教育課程の評価の実際

(1) 生徒の評価を取り入れた構想事例

現在，各学校における教育課程の評価は，各学期末に実施されることが多い。そのため，学期末の評価の客観性を高めることが教育課程の評価を正しく行うために重要である。具体的には，従来実施されてきた教師の視点からの評価に加えて，生徒が自分の姿や取組状況を診断する評価を実施し，両者の評価を比較することにした。

これによって，生徒と教師がとらえる教育効果や意識のズレなどを判断できるようになり，工夫・改善のポイントを見出せるようになると思う。

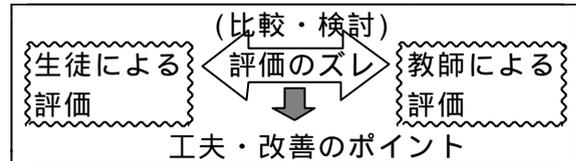


図1 客観性を高める生徒と教師の評価の比較

教師と生徒が行う評価については，次のような視点からの教育課程の評価を実施することが考えられる。

視点1	教師が教育課程の実施等に対する教師の取組状況を評価する。
視点2	教師が教育活動実施後の生徒の変容から教育課程の実施状況等を評価する。
視点3	生徒が自分の変容や生徒の取組状況を振り返り，評価する。

図2は，視点1，2の観点からの評価であり，手だてを講じた結果，生徒がど

のように変容したかを教師が評価するための項目例である。また、図3は視点3の観点からの評価であり、生徒が自分自身を評価するための具体的な項目例である。

A 学習指導
4.十分 3.ほぼ十分 2.やや不十分 1.不十分

評価項目 (教師用)	評価
A 生徒の実態を踏まえ「分かる授業」の展開に努めたので、生徒は内容をよく理解し、基礎・基本が身に付いた。	
学習課題やねらいを明確にして授業を展開したので、生徒は目的意識をもって意欲的に学習に取り組んだ。	
教材教具の工夫や指導法の改善に努めたので、生徒は主体的に問題解決活動を展開するようになった。	
個々の生徒の定着度を把握し、個別指導に努めたので、内容の定着が図られ、生徒の基礎学力が向上した。	

図2 視点1,2による教師の評価項目例

A 学習指導
4.十分 3.ほぼ十分 2.やや不十分 1.不十分

評価項目 (生徒用)	評価
A あなたは、授業の内容がよく理解でき、学力が向上したと思いますか。	
あなたは、学習課題やねらいを理解して、目的意識をもって意欲的に学習に取り組みましたか。	
あなたは、自分から進んで問題解決に取り組むようになりましたか。	
あなたは、よく分からなかったところについて分かるまで教えてもらったり、積極的に質問したりしましたか。	

図3 視点3による生徒の評価項目例

例えば、図2、3に示した の評価結果を比較したとき、毎時間必ず学習課題を設定して授業を展開したので、生徒は目的意識をもって意欲的に取り組んでいたと教師が判断しても、生徒自身があまり目的意識

をもてなかったと評価するならば、ねらいが達成されるほど十分な教育効果は上がっていないことが考えられる。このような場合、各教科部は生徒が目的意識をもてなかった原因を探り、手だての妥当性を吟味し、新たな手だてを工夫する必要がある。このように、教師と生徒による評価の相違点を分析することで、手だての改善の方向を見出すことができるのである。

また、評価の客観性を更に高めるには、各学校においてなされている様々な検査結果を活用することが効果的である。例えば、図2、3の評価項目Aにおいて、教師も生徒も、基礎・基本が身に付いて学力が向上したと評価している場合、学力検査の結果と比較することにより、学習の達成度や定着度を客観的に把握することができる。

各学校では、学力検査のみならず運動能力検査や道徳性検査等の様々な検査結果を活用することによって、手だての妥当性を判断し、一層適切な手だてを工夫することができると考えられる。

(2) 各教育活動の充実を目指す評価

学校教育目標を達成するために、各学校の教育課程には、学校行事をはじめとする様々な教育活動が位置付けられている。また、学習週間や生活週間、読書週間などのように生徒会を中心にした活動が展開されることも多い。これら一つ一つの教育活動についても、その成果について適切な評価がなされなければならない。そこで、図4のような教育活動チェック票を利用し、それぞれ計画・実施・評価の各段階で形成的評価を行い、充実を図ることが重要である。

担当者	印	責任者	印
教育活動名			
実施時期 平成13年 月 日()			
計 画	1 前年度からの引き継ぎ		
	<input type="checkbox"/> 前年度からの引き継ぎ書類や実施状況を示す資料の確認を行った。 <input type="checkbox"/> 前年度の課題、問題点、改善案等の検討を行った。		
	2 教育活動の計画立案		
	<input type="checkbox"/> 学校教育目標やめざす生徒像の具現化に果たす役割を確認した。 <input type="checkbox"/> 学校教育目標の具現化に資するねらいを設定した。 <input type="checkbox"/> 活動計画を立案し、責任者の確認を行った。 <input type="checkbox"/> 予算額と予算執行の手順等の確認を行った。 <input type="checkbox"/> 関係機関や関係者（外部機関も含む）への連絡をとった。		
実 施	3 実施方法の確認		
	<input type="checkbox"/> 関係者へ連絡し、実施の日時、場所、必要な器具を確保した。 <input type="checkbox"/> 消耗品等の購入と配布を行った。 <input type="checkbox"/> 参加者（生徒及び教職員）への通知を行った。		
評 価	4 評価計画		
	<input type="checkbox"/> 評価方法の確認を行った。（評価方法・・・） <input type="checkbox"/> 評価の規準を作成した。（数値化する 数値化しない） <input type="checkbox"/> 評価の対象を明らかにした。（教師 生徒 保護者 その他） <input type="checkbox"/> 評価の日程を明らかにした。		
実 施	5 実施状況		
	<input type="checkbox"/> 計画通り実施できた。 <input type="checkbox"/> 計画通り実施できなかった。理由		
評 価	6 評価の実施		
	<input type="checkbox"/> 活動状況を評価した。 <input type="checkbox"/> 達成度を評価した。 <input type="checkbox"/> 様々な角度からの評価を集めた。		
実 施	7 評価結果の分析		
	<input type="checkbox"/> 教育目標やめざす生徒像の具現化に資する活動であったか検討した。 <input type="checkbox"/> 実施に当たって無理のない計画であったか検討した。 <input type="checkbox"/> 次年度実施に向けて、改善すべき点を明らかにした。		
改善点			

図4 形成的評価を図る教育活動チェック票

また、教育活動チェック票をデータとして蓄積し、今後の運営や次年度の編成に生かすことを考えて実施することも大切である

3 教育課程の改善

教育課程の評価は、教育課程の改善を図り、教育効果を高めることを目的として実施する。したがって、評価の結果を教育課程の改善のためにどう生かしていくのが重要である。教育課程の評価を生かして改善を進めるには、次のような手順で、組織的に行うことが大切である。

学期末評価や諸検査結果、教育活動チェック票を基に、各教育活動の成果や手だての妥当性を分析、評価する。

該当する教科、領域、校務分掌組織の各部において、これまでの手だての問題点を明らかにし、改善案を作成する。

学年会や職員会議等に改善案を提示し全教職員の共通理解を得て実践する。

教育課程の編成、実施は生徒や地域の実態に応じてなされなければならない。そのため、各学校の教育課程において実施される教育活動や手だては自ずと異なってくるはずであり、この違いが特色ある学校づくりとして表出してくるのである。したがって、特色ある学校づくりを行うことは、各学校の実態を踏まえた個々の教育活動や手だてを、全教職員の協力の下、担当者を中心に責任をもって計画、実施することにほかならない。だからこそ、その成果や手だての妥当性について各学校が客観的に評価し、常に新たな改善策を立案、実施していくことが求められるのである。

教育課程を評価することは、学校の教育目標が生徒の姿として表出しているかという観点と、各教育活動は学校教育目標の具現化に資する妥当な活動であったかという観点の両面から学校経営の責任を問うことである。今後、ますます学校の説明責任が求められるようになることを考えると、教師一人一人が学校経営に参画しているという意識をもって取り組むことが重要である。つまり、自分の教育活動によって生徒がどのように変容したのかを的確にとらえ、常に工夫・改善を行うという視点から、教師一人一人が教育課程の評価に取り組むことが求められているのである。

【引用・参考資料】

文部省『中学校学習指導要領解説総則編』平成11年
 新世紀カリキュラム審議会『鹿児島の特色を生かした教育課程の在り方について(答申)』平成13年
 (新教育課程の編成に関する検討委員会)